

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方<sup>463</sup>

チェチェン戦争の暗闇の中で「燃え立つ炎」として直立する「命がけ」の女たち

アンナ・ポリトコフスカヤがチェチェン・レポートのなかで、「これまでの歴史で数多くあった試練を耐え抜く鍵となっていたあの有名な民族の強さはどこにも見つけられなくなった、『同胞』であるからというだけで敢然とかばおうとするあの一枚岩の民族は、今や神話の世界にいつてしまったのだろうか？」と殊更に言い募るのは、帝政ロシアの將軍や総督たちから「野獣」「強盗団」「野蛮人」、そして最近のロシアからは「反乱者」「分離主義者」「武装分子」「破壊工作分子」と悪し様に呼ばれてきたのとは裏腹に、チェチェン人はコーカサス山岳地帯に寄り添って、近代文明の繁栄に埋没している我々には信じがたいほどの、共同体における美風（と確かに思われる）を古来から培ってきているからだ。ゲオルギー・デルルーギアンは論考「何が真実か？」のなかで、チェチェン人についてこう説明している。

《コーカサスという独特の地形を持つ土地がなければ、ここに住む少数民族たちは、すぐ南方に隣接する中東の古代文明人や、北方に広がる広大な平原を支配した、中央アジアから侵略してくる遊牧民に征服され併合されたにちがいない。だが、この土地が彼らに逃げ場所を提供してくれた。これらの二大勢力の間にはさまれながらも、コーカサスの山岳民族はその複雑ではあるが守られた環境に適応することによって生き延びてこられたのだ。》世界のどこの言語にも似通っていないコーカサスのチェチェン語やその他の多くの言語が現在も維持されている理由である。

《この人びとの社会的、経済的適応性は、古代スイスのヘルヴェティア族、バスク人、アルバニア人、スコットランド人、アジアのクルド人やパシュトゥン人などの山岳民族に共通して見られるものと似通っている。高地の環境は厳しいため、そこに住む人びとはやりくり上手で、強靱、経済的でなければならない。男たちはたいてい戦闘能力に優れ、ナイフ、剣、最近では銃などの武器を大切にしている。彼らにとって温かいもてなし、友情、忠実さ、家族の誇りなどは「血の復讐」と同じく神聖なものだ。しかし山岳地帯では、たとえ相手に大切な友人、気前の良い主人、恐れを知らぬ敵と思わせたにしても、それで必ず生命が保障されるとは限らない。

第一次チェチェン戦争後、チェチェンはオオカミ（チェチェンは敵に対して自国を示すのにこの動物を好んで使う）の写真を印刷したピラを使ったプロパガンダ作戦に出た。それには、「俺に手を出す前に二度考える！」とあった。この虚勢は真の勇気を持つ多くの人に支持されているのだろうが、彼ら自身の深刻な不安感をさらけ出してもいる。山岳民族は少人数になりがちだが、それは山という地形では大勢の人口は支えきれない

からだ。また、彼らには独自の国家というものが存在しない。国家組織はそのような地形には根づくことができない。人びとはみな武装しているし、租税を払えるほどの余裕はない。山岳民族に典型的な社会組織は国家のない氏族社会だ。氏族（タイプ）とは社会的な相互関係を形づくり、人びとの間の信頼感を育む基盤となるものだ。氏族の評判は、伝説という形を取って世代から世代へと途絶えることなく深められ伝えられていく。そしてこれらの伝説によって人びとは偉大な行為、中でも勇気と誇りに満ちた行為にいたる動機を与えられる。

ここで、以上の話は社会学者が「典型の抽出」と呼ぶものであることを忠告しておきたい。私たちと同様、山岳民族は複雑で矛盾に満ちている。私が指摘しておきたかったのは、外部の人間を必ず魅了する民族的、文化的な特徴を合理的に説明する山岳民族の誇り、独立心、強靱さ、猛々しさなどの要素についてだ。》

『チェチェンで何が起きているのか』の執筆者の一人、林克明はもう少し詳しく具体的に説明してくれる。たとえば、チェチェン社会を構成する氏族（タイプ）という血縁関係による深い結び付きについて、《親戚どうし、友人どうしの人間関係は非常に濃厚だ。加えて、大家族主義とも共同体主義ともいえる。ただし、共同体が重要視されるわりに、個人主義は日本よりはるかに強いように思える》といい、ここに「チェチェンの強さ」を見出し、「彼らの抵抗力の源泉」を次のように列記する。

《その一、生命力。いま何をしたら生き延びられるかを咄嗟に判断できる能力だ。食糧が足りない場合どうするか。どうやって老人を避難させるか。難民として流れた先でどうやって寝床を確保するのか。停電したらどうするか。こういうことを瞬時にやってのける。生命維持のための賢さといえようか。

その二、柔らかさ。数百年間もロシアに圧迫されているのだから、不屈の民族、悲劇の民族には違いない。追いつめられているだけに強硬になる面もある。でも、柔軟さは失っていないのだ。

ある中年の元司令官は、自分の家族や村を守るため、ロシア占領軍と取引した。自分の手元にある金の一部をロシア将校に握らせ、ときにはウォッカを共に飲み、いっしょに働く。そのかわり自分の管轄する村を攻撃させない。

では彼は裏切り者なのかといえば、独立派勢力とは協力し、いざという瞬間を待っているのだ。まったく、したたかである。

こうした柔軟さは、彼らが生まれながらの戦士と呼ばれると同時に、生まれつきの商売人ともいわれることに関係する。実際、ビジネスに長けている人が多いが、独立のために戦う中で狂信的になっては商売にならない。

その三、自然児であること。首都を除き、ほとんど全部が農村地帯だ。そのため、子どもたちから大地に親しみ、水を汲んだり、まき割りなどして家事を助けている。子どもたちは一日中屋外で遊び続け、おもちゃも日本ほどないから、自分たちで遊びを考える。おまけに、40度近い灼熱の太陽の下や、零下20度近い寒気のなかでもよく遊

ぶ。そうやって小さな頃から強靱な肉体がはぐくまれる。》

また、「常に死を意識している人間の美」をチェチェンの男たちは感じさせるという。95年1月、夫婦でロシアを旅行し、チェチェンの男に接した妻が、「私ね、チェチェンに行ってあの人たちに会うと、いつも自分が女だって感じるの」というほど、《彼らには、おとこ気、頼もしさといったものがある。ということは、その対極にいる女も当然美しく、《男の色気がある》と賞賛する。実際にチェチェン人に接した感想をこう記す。

《苦しい戦時下の暮らしにもかかわらず、住民は私たちの名前も身分も尋ねず、国籍にも関係なく食糧を分け与えてくれる。何しろ、自分たちを殺しているロシア兵の母親が息子を捜しにチェチェンまでやってきても、彼女たちを支えていたのだ。(中略)

ある寒い冬の日、独立派のゲラーエフ国防大臣に出会った。彼の姿を見た瞬間、脚がすくんですぐには近づけなかった。大柄でがっちりとしており、明るい栗色の髪と髭、青い眼はいつも遠くを見ているようだ。身体全体から光のようなものを発している。

周辺にいる彼の部下たちも似たような光を放っている。彼らの多くは、元々はプロの軍人ではない。学校の先生、農民、学生など職業はさまざまだ。おそらく独立派武装勢力の大半は、こういう人たちで占められている。自分の家族と故郷を守るために武器を手にした男たちである。そしてみんな美しい。それは、常に死を意識している人間の美である。

内面が外面に表れていることもあるが、何よりも驚くのは、彼らの容姿そのものだ。顔立ちや体つきがいいのはもちろんだが、戦闘に出かける前に鏡の前で髪を整え、香水を振り撒く。私服でいるときは、一時間に1回靴のホコリを取る。半分、私はあきれて見ていた。》

アパートに訪れたチェチェン人の青年が雨の中を帰る際に、《女物の傘を渡すと、一瞬ためらった彼は、いらぬと言う。女物の傘をさすなど、彼らにとって裸で街を歩くに等しい。元ソ連軍空挺部隊将校だったチェチェン人は「男にとって美しいということは最も重要なこと」と言い切る。》ここに「厳然とした美意識」を感じた筆者は、ショックを受ける。19世紀にアレクサンドル・デュマも『コーカサス旅日記』のなかで、「住民の美しさ、とりわけ男の美貌には目を見張るものがある」と書いていることや、チェチェン取材して帰ってきた日本人記者が、「林さん、男に会ってドキドキしたの初めてですよ。ヘンなんですかね、私は？」と言ったことも書き留めている。

「男の美しさ」だけでなく、チェチェンの「女性の強さ」にも視線が注がれている。《1996年6月20日のことだった。私が滞在していた家の門を開け、30歳くらいのゲリラ兵士が入ってきた。濃い髪を生やしたその男は、テラスに置かれた椅子にどっかりと腰をおろした。チェチェンの家では、夏はテラスで食事をするので、屋外にもガス台があり、食事がいつも用意されている。

その家の娘らしき20歳くらいの女が出てきて、テーブルの一番端にいるゲリラ兵士にお茶を出すと、すぐにガスレンジの前に引き返した。二人の距離は約4メートル。女

はレンジの前で立ったままだ。男がボソボソと話しかけると、彼女は微笑みながら応える。

一時間ほどで男は4杯の紅茶を飲み干したが、そのつど彼女は紅茶を注ぎ足し、また4メートル離れた定位置に戻る。そしてまたボソボソと小さな声で短い会話を交わす。

日が暮れると裸電球がともり、目の前のテラスが舞台のように浮き上がる。二人は見つめ合いながら静かな笑みを浮かべている。二人の間に保たれた距離は、そのままチェチェンの男女関係を表しているように思える。男には男の世界があり、女には女の世界があり、お互いにその領域には踏み込まない。男女の役割分担も明確である。つまり、「らしさ」が厳然として存在する。》

この男女の情景に「男女差から生じる抗しがたい様式美」を見出して、《それなりの男が存在するところでは、その対極にいる女もなかなかのものだとわかって》くる。《チェチェンでは、親子三代同居が普通で子沢山だ。親戚が同居することもあり、大家族である。その中心になるのは長老（年長の男）だが、家事を切り盛りするのは主婦である。彼女らは、炊事、洗濯、掃除、子どもの世話、と朝から晩まで働く。知人友人がアポなしで訪問するのが一般的であり、そのたびに食事を出してもてなす風習がある。その役目は女がすべて引き受けている。》昔の日本によく似た良妻賢母だが、日本と異なって女たちは男を好き勝手にはさせない。

《チェチェンの女たちは、男を決して甘やかさない。妻が家事一切を引き受け夫の面倒を見るのは、男（夫）たちが命を投げ出して自分たち家族を守っていることを心に刻み付けており、暗黙のうちにそれを男に求めるからだ。したがってエラそうに見える男たちは、実はつらい。

しかし、その女たちも今回の戦争で変わった。ロシア占領地域で抵抗運動を始めたり、外国人ジャーナリストを潜入させる手はずを整えたり、あるいはロシア軍の人権侵害の実態調査などで女たちが大活躍なのである。男より一歩下がっていた彼女らが、一歩前に出た感がある。

なかでも、戦争という過酷な状況が多く女性のジャーナリストを誕生させていることは見逃せない。（中略）そのほかにも、いわゆる活動家として女たちが積極的に動き回っている。》

モスクワやチェチェン、ヨーロッパでチェチェンの現状や人権運動を訴えている、「北コーカサスの女性」という団体のザイナップ・ガシャーエヴァは、19歳の長男が筆者を地下鉄駅まで送ってくれた際に、警察官に囲まれて逮捕された時、30分後には警察署から息子を取り戻した。

《大勢の警察官相手にひとりで闘ってきた様子が容易に想像できた。困難な状況でも、断固とした姿勢を貫く。同じ団体に属するズーラという人も、ロシア占領下でチェチェン国旗を振りかざして歌を歌いながらデモ行進したり、屈することはなかった。だが、2000年1月に彼女もついにロシア秘密警察に逮捕され収容所送りとなる。親戚や知

人がかき集めたカネをロシア軍に渡した末に釈放されたが、釈放後一カ月経過した時点で私が再会したときは、書類も上手くめくれないほど手がブルブルと震えていたのを思い出す。彼女は活動を再開するも、2003年の5月ごろに自宅にロシア特殊部隊が押し入り、家族とともに殺された、と来日したチェチェン人から聞いた。》

ここでポリトコフスカヤがチェチェン・レポートのなかで取り上げていた、アルハン・カラ村長のマリーカ・ウマンジェヴァ　彼女も02年10月のモスクワ劇場占拠事件の二カ月後の12月2日に殺された　のことが想起される。

《軍人たちはその夕方ずっと装甲車で彼女の村をあちこち動き回っていて、真夜中、まさに外出禁止時間に迷彩服を着た何者かがマリーカの家に入り、彼女を納屋に連れ出した。マリーカの弟が亡くなってから、代わって育ててきた子どもたちが「迷彩服」の連中にしがみついて、殺さないでと頼んだが、むだだった。血圧が高く、心臓の悪い、いつも脚がむくんでいる54歳の女性、このような人たちの息の根を止めることに慣れきっている獣たちは、マリーカを銃殺して、姿を消した。》

ポリトコフスカヤにとってマリーカは「英雄」であり、「唯一の、比類ない人物だ」だった。前任者は殺され、戦争による遺体が次々に見つかる村の村長になった。

《彼女の理性はこう言ったはずだ、「おとなしくしている、用心しろ」と。ところが彼女はまったくその逆をやっていた。チェチェンのような戦時無政府状態で、誰にとっても命がけの危ない地帯の、もっとも勇敢で向こう見ずな村長になったのだ。

村に入ってくる何台もの戦車の前にマリーカは武器も持たずひとりで出ていった。村長たちのうちただ彼女だけが裏切り者の検察官に面と向かって叫んだ。「汚らわしい奴らめ！」と。検察官たちは軍の將軍たちにおびえて、拷問や人びとの抹殺を単に確認するだけだった。マリーカをだまし、彼女の村民を殺してしまった將軍たちを、マリーカは「人でなし！」とどなりつけた。マリーカはアルハン・カラの村民の良き部分を守ろうとして夢中になって戦っていた。

そんなことは今日のチェチェンでほかに誰もやらなかった。男の誰ひとり。戦っている双方でどんな地位にある男も。》

ポリトコフスカヤによれば、マリーカの勇敢さは傑出している。民衆の集会で選ばれた貧しい村の村長のマリーカは、誰もが恐れるロシア参謀本部の本部長クヴァシニン將軍が彼女についての中傷をテレビで撒き散らしても、裁判に持ち込んで闘ったし、「国民によって選ばれたチェチェンの大統領」になろうとする、クレムリンに支えられたカディエロフに対しても、はっきりと「国民を売った者」と呼んで、彼の政府をあらゆる手段で阻止しようとした。そんなマリーカをアルハン・カラの人たちと同様に崇拜していたポリトコフスカヤが、「マリーカ、どうしてそんなに勇敢でいられるんです？ 殺されてしまうではありませんか？ あの連中は容赦しないんだから」と訊くと、彼女は、「アーニャ、私は自分がダンコー（ソビエトの作家、ゴーリキーの作品『ダンコーの心臓』の主人公。民衆を闇の時代から導き出すために自分の心臓を取り出して、その燃え立つ炎となった心臓をか

ざし、人々を救い出した)だと思っているの」と答えた。

ポリトコフスカヤは、「アーニヤ、なんて欺瞞に満ちた戦争なの！ 私が一番恐れているのは誰だと思う？ もちろん連邦軍よ。だってあの連中にとって侵してはいけないものってないんですもの。チェチェンの側も同じだけど、でもこっちは無法者でしょ、あっちは憲法の名においてやってくるんですもの」というマリーカの言葉を思い出しながら、彼女と一緒に第二中等学校の卒業式に行った時のことについて記している。

《彼女が3人の男の子と9人の女の子に、はなむけの言葉をおくった。連邦軍が村人の体を爆破してしまった廃墟を村の人たちやマリーカと一緒に掘り返し、手や足、服の切れ端を集めた生徒たちだ。男の子たちは掘り返した人びとの葬儀に参列した。マリーカは、価値ある選択をすることについての、一見ありきたりなことを言ったけれど、アルハン・カラの置かれた状況下ではその言葉には、私たちの日常生活から失われてしまった深い意味があった。村人たちの選択が自らの人生を左右するということだ。そしてそこに過ちの入る隙はないし、妥協の余地もない。

私は彼女の言葉を10月25日に思い出していた。「ノルド・オスト」を占拠したテロリストのリーダーのモフサル・バラエフはアルハン・カラの出身だった。》

マラーカと同じアルハン・カラ出身のモフサル・バラエフの名が出たので、モスクワ劇場占拠事件に言及するが、若いバラエフ司令官は舞台の上から人質全員にむかって、「チェチェンでの戦争行為の停止とロシア軍のチェチェンからの撤退がわれわれの要求だ。拒否されれば、劇場を爆破し全員が死ぬ」と語った。先の『チェチェンで何が起きているのか』によれば、バラエフとの交渉経過は次のようなものであった。

《事件発生から二晩過ぎた10月25日。水や食糧が搬入されたとはいえ、内部の人々の疲労は蓄積していった。紛争地や災害地で活動しているレオニード・ロシャル医師(69歳)は、合計8回劇場に入り、人質たちを助けた。

「バラエフ(司令官)とも三回話をしたが、彼も3歳と1歳の子をもつ父親だ。私があなただの子を人質にしたらどう思うのか、われわれは(戦争で傷ついた)チェチェンの子たちも手当てしている。子どもを解放してほしいと迫ると、彼は8人の子どもを解放した。でも、その時点で27人の子どもが残ってしまった」

ロシャル医師は、水、食料、クスリを十分に入れることを要求し、実現させたという。

人質たちはそれでも次第に追い詰められていき焦燥感を募らせていくが、25日夜になってから、事態が好転する。いや、劇的な解決への道が開かれたといったほうが適切だろう。ワシントンでチェチェン問題の会議に参加していたロシア人女性ジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤがゲリラに交渉役として指定され、急遽帰国して交渉を始めたからである。

「バラエフ司令官たちと話し合いましたが、彼らは最後まで交渉する姿勢をもち続けていました」

ポリトコフスカヤは、こう振り返る。まずは相手ときちんと向き合うことが重要だと

考えた彼女は、彼らに語りかけた。

「あなたたちは本当に若い。私にはあなたたちと同じくらいの息子がいます。だから、あなたたちにも生き残ってほしい」

司令官のバラエフは24歳。ほかのメンバーもたいていが20代前半に見えた。「死ぬより生きるべき」とポリトコフスカヤが強くいうと、バラエフは少し感情的になったという。

「われわれの目的は、戦争を止めさせること、ロシア軍を撤退させることだ。そのためにここに来たんだ。それができないなら、ここで死ぬ」

バラエフは語気を強めたが、それでも劇場内に入ったほかの交渉人の誰よりも、自分が彼らに信用されているのがわかった、とポリトコフスカヤはいう。それは、彼女が長年チェチェン問題を深く広く取材し、チェチェンの置かれた厳しい状況をよくわかっていたからだ。》

ポリトコフスカヤが、《彼らが要求していた戦争の即時停止とロシア軍の全面撤退》という、ロシア政府が呑みそうにない非現実的な案を修正して、ロシア政府にも妥協させるような具体的な解決法を提案し、バラエフからもその内容の実現による人質解放の約束を取りつけ、人質と武装勢力の生命を救おうとする努力を誠心誠意尽くしたが、アクシデントもあって、突入作戦に向けて着々と準備を進めていたロシアの特殊部隊の突入を阻止することができず、有毒ガスが劇場内に立ち込める中で170人以上の死者を出した。突入前日の25日未明にNTV（独立テレビ）のカメラが内部に入って撮ったバラエフのインタビュー映像は、当局による禁止で、「何度もいっていますが、われわれの目的は戦争を中止し、軍を撤退させることです」と語っていた言葉抜きで流された。

バラエフが射殺されたほぼ一ヶ月後に、彼の出身地であるアルハン・カラ村の村長マリーカもまた、銃殺されてしまったのだ。前述したように、この村もチェチェンの他の村と同様に、ロシア連邦軍による終わりなき「掃討作戦」（米軍によるイラク・ファルージャの「掃討作戦」とも、何と呼応し合っていることか）によって、爆破された遺体の廃墟地となった。一般の人たちに対しては、「居住証明検査」と説明されている対テロ作戦としての「掃討作戦」とは、一体なにを掃討するのか。ポリトコフスカヤはレポートのなかで、この用語について正確に説明している。

《2001年末から2002年初めにかけてが、この戦争で最も残虐な時期となった。「掃討作戦」はチェチェン全土をかけ巡って、行く手のものを蹴散らした。人びとも、家畜も、衣服も、家具も、装飾品も、家財一式も。その行く先は、シャリ、クルチャロイ、ツォツァン・ユルト、パチ・ユルト、ウルス・アルタン、グローズヌイ、またシャリ、再びクルチャロイ、再々度アルグンとチリ・ユルト。何度も続く封鎖、泣き叫ぶ女たち、ありとあらゆる理由をつけて、未成年の息子たちをチェチェンの域外へ何とかして連れ出そうとする親たち。モルテンスコイ将軍 - 北コーカサス合同軍の司令官で勲

章をたくさんもっている - が、「掃討作戦」に抵抗した者たちの死体を背景に、チェチェン制圧の現段階における一番の英雄として、「武装集団」捕獲のための「掃討作戦」の成果をテレビで報告している。》

チェチェン戦争のなかで育ってきたグラエフが、アルハン・カラ村でこの残虐な「掃討作戦」による獲物として痛めつけられたかもしれないし、彼の家族、親族の誰かがチェチェン戦争によって、この「掃討作戦」によって生命もろとも掃討されてしまったかもしれないと想像される。彼が追い込まれている切羽詰まった状況のなかで、「われわれの目的は、戦争を止めさせること、ロシア軍を撤退させることだ。そのためにここに来たんだ。それができないなら、ここで死ぬ」と語っていた言葉を聞きとるなら、その要求のなかに彼がどれほどの命がけの思いを込めているかが、くっきりとみえてくる。彼にはもう、ただ単に命を永らえさせるだけの生きかたはできなくなっていた。自分たちの命と引き換えに、「戦争を止めさせること、ロシア軍を撤退させること」の取引に飛び込むことを決心したのだ。そのことだけが生きるに値するし、自分たちの民族が滅ぼされるなかでどうやって生きることができるのか、という必死の叫びがそこには込められていた。「冷酷非道」な行為のなかに彼らの切々たる訴えを我々がどこまで聞き取ることができるのか、が無関心な我々にも問われていたのである。

「チェチェン問題」にますます踏み込むなかで、ポリトコフスカヤはさまざまなことに直面し、多くのことを目撃したにちがいない。見なかったほうがよかったことや、知らなかったほうがどれほど幸せでいられたか、とつくづく思われる悲惨で愚劣な戦時下で、それでも彼女は取材をやめなかったし、チェチェンから引き返そうとはしなかった。もちろん、彼女が自らの任務を放棄しなかったのは、取材対象たるチェチェンの人々の苦難に対する彼女の共感と持ち前の正義感に因るところが大きいと思われるが、恐怖と徒労感で挫けそうになる彼女の心を支えつづけたのは、マリーカを始めとするチェチェン女性たちの背筋が真っ直ぐな勇敢さであったにちがいない。ポリトコフスカヤは彼女たちの不屈な勇敢さに何度も出会って、ここで退くなら、この先どこでも退くことになるし、今後ずっと退くような人生を送ることになるから、いまここでの勝負が自分の人生にとっての岐路になるといわんばかりの彼女たちの気魄を呼吸してきたにちがいない。

ポリトコフスカヤがマリーカにむかって、「マリーカ、どうしてそんなに勇敢でいられるんです？ 殺されてしまうではありませんか？ あの連中は容赦しないんだから」と問うたことは、まさしく彼女自身に向けられた自問にほかならなかった。マリーカが彼女に「アーニャ、私は自分がダンコーだと思っているの」と答えたことは、したがってポリトコフスカヤもまた、闇の時代を照らしだすダンコーとして生きていくことになるのを指し示していたのである。マリーカが殺されたいま、ポリトコフスカヤの心の中で生きつづけているマリーカが、ダンコーとして彼女に語りかけてやまない衝迫をかかえて、マリーカだったらそうしたであろうように彼女は戦乱のチェチェンを歩きまわっていたのだ。

戦争の真実に果敢に踏み込むポリトコフスカヤに匹敵するジャーナリストとして、男性のアンドレイ・バビツキーについてもここで取り上げないわけにはいかない。「チェチェンにバビツキーあり」と名を馳せるバビツキーは、アメリカ政府系のラジオ局であるラジオ・リバティの記者だが、彼のレポートもまた、ロシア政府の発表をことごとく引っくり返すものであったために、ロシア当局から睨まれていた。前出の『チェチェンで何が起きているのか』によると、彼は00年1月、他の記者から現像を頼まれた写真を証拠として、チェチェンのゲリラ活動に参加した疑いで逮捕されたが、当時のクリントン米大統領やオルブライト國務長官の批判によって、ロシア政府はでっちあげの「捕虜交換」のシナリオに基づいて、事態を切り抜けようとした。だが、軍がビデオ撮影した「捕虜交換」の様子をロシアのテレビ局に放映させ、《プーチン大統領自らが「裏切り者」と、彼を名指ししたことをマスコミが大々的に報じたことなどで、それまで命がけで彼が伝えてきた報道が、チェチェン側に立ったプロパガンダにすぎないというイメージが流布してしまった。戦争の真実を伝えていた一個人を社会的に抹殺しようとした文字通りの謀略であった。》

96年に終結した第一次チェチェン戦争の敗北の「反省」のうえに立って、プーチンが始めた第二次チェチェン戦争では、厳しいメディア規制が行われた。その象徴的な事件が00年5月11日、特殊部隊によってメディアモストというメディアグループの本部が襲われ、家宅搜索された出来事であった。《同グループの中心であるNTV（独立テレビ）のメインキャスター兼社長のエフゲーニー・キセリョフが、メディアが置かれた状況について語った。》

「政府は、われわれにチェチェンの真実を伝えてほしくないと思っている。まず取材許可証を取るのが極めて難しい。仮に取得できても、大幅な制限があります。軍は、テレビ取材班や新聞記者グループを軍に同行させてくれることもある。しかし、取材時の移動、撮影、インタビューはすべて許可なしにできません。少しでも自由に取材すれば、取材許可を取り消される恐れがあります。

また、指名手配されているゲリラのリーダーとのインタビューは禁止されています。『すべての報道機関は、危険な犯罪者とのインタビューを放映する権利がない』という警告が出されたのです。とくにアンドレイ・バビツキーの事件は、チェチェン側からレポートすること自体が犯罪とされることを示しました」

紛争地域のチェチェン国内だけでなく、モスクワでのチェチェン人に対する迫害も激化しているなかで、外国メディアへの規制が強化されている以上、チェチェン人ジャーナリストによってチェチェンの現状が伝えられる以外になす術はなくなっていた。『チェチェンで何が起きているのか』の著者の一人、戦争が始まってから、チェチェンを15回訪れている林克明は、チェチェンでの「ジャーナリストの誕生」を報告している。《いつも驚くのは、チェチェン人のジャーナリストはほとんどが女性であることだ。いま目を閉じると、スカート姿でイスラム風にスカーフを頭に巻いた女性たちが8ミリビ

デオやコンパクトカメラで取材している姿が目につく。プロもいるが、多くは「素人」である。ロシア軍の占領下では、男たちがジャーナリストとして活動するのはほとんど不可能である。いつ、どこで逮捕され、強制収容所に送られるかわからないからだ。

ならば、自分たちがやらなければ誰も真実を報道しない。そんな思いで、主婦が、学生が、教師が、あるいは人権活動家たちがジャーナリストとして立ち上がったのである。

彼女らはまず現場に行く。そして片端からビデオ撮影し、写真を撮りまくる。難民や虐殺から生き残った人から聞き取り調査をすると米粒のような細かな字で、すべての情報を記録していく。まるでじゅうたん爆撃的な取材だ。少ない時間で最大の効果をあげるために、普通は取材対象を効率よく選択し、ポイントを絞る。それは合理的な手法である反面、へたをすると手抜きになってしまう。彼女たちは「素人」ゆえに手抜きがない。

ロシア政府が情報統制を強めても、彼女たちが取材した素材は国外へ持ち出され、海外で報じられることも少なくない。もし、彼女たちの活躍がなければ、ロシアや世界の行方を占うチェチェン戦争のさまざまな局面が、歴史の闇に埋もれていたかもしれない。》

「不死身の女」と称される38歳のジャーナリスト、ハズマン・ウマーロヴァはロシア語の教師で、95年4月7日から三日間にわたって「掃討作戦」が展開されたサマーシキ村での約300人の虐殺の一週間後に《村に潜入したが、ジャーナリストはいなかった。自分で伝えなければならぬと思った彼女は、村に1台しかなかったパナソニックの8ミリビデオカメラを手にした。ジャーナリスト、ハズマンが誕生した瞬間である。

その後彼女は、24歳の青年、45歳の女性とともに三人で「大統領放送」という地下テレビ局をつくり、あらゆる戦場、あらゆる村を取材してまわることになる。チェチェンのレジスタンスがロシアの病院を占拠して和平交渉の開始を要求した事件、ダゲスタン国境で人質を巻き込んだレジスタンス部隊と、アルファ部隊（ロシアの特殊部隊）が激突して大量の犠牲者が出た戦闘など、大きく情勢が変わる場面には、必ず彼女の姿があり、生き残った。

ロシア軍の追求を避けて3日と同じ場所には滞在せず、廃屋から取り出した金属で作ったアンテナを通し、詳細な情報を発信し続けたのだ。》

28歳のタイサ・イサーエヴァもまた、「不死身の女」であり、チェチェンの首都グロズヌイでチェチェンプレスというインターネット新聞を発行し、最前線の取材をしていた。ところが、大規模な空爆と砲撃でインフラが破壊されたので、インターネットが作動しなくなり、新聞復旧のために行ったグルジアでチェチェンプレスを復活させた。

29歳のライサ・タウハーノヴァは南ロシア生まれのチェチェン人であり、大学卒業後ロシアのテレビ局に就職したが、独立宣言をした「祖国」に移住し、戦争報道を続けた。《彼女の映像は英BBCなどで放映され、高く評価されている。》彼女たちが《死の危険まで冒して仕事を続ける》理由の一端について、ライサは語る。

「去年（1999年）の10月30日か31日だったと思います。スタールイアタギと

いう村が空爆されたときでした。あまりに攻撃が激しいので地下に隠れていたんです。そのときラジオは、プーチンの『われわれにとって危険なのはテロリスト（レジスタンス）ではなく、ジャーナリストだ。彼らを殲滅するべきだ』という発言を放送しました。それをいっしょに聞いていたグルジア人とフランス人の女性ジャーナリストは驚いて帰国してしまいました」

このラジオ放送があった直前の10月29日に、ロシア空軍による避難民の大虐殺が起こり、直後に現場を取材したライーサの第一報が第三者を通じて、世界に発信されたためにプーチンを刺激していたのだ。この虐殺について生き残った51歳のリプハン・バザーエヴァは、こう証言している。

「1週間前からマスコミを通してロシア政府は、避難民のために国境を三カ所開けると再三にわたり通知していました。それまでは国境が封鎖されていたので私たちは猛爆のなかに閉じ込められていたのです。10月29日の早朝、私たち家族はイングーシ共和国に二台の車で向かいました。

国境に近づくに連れてすごい数の車が連なっていました。乗用車、バス、マイクロバス、中には歩いている人もいましたね。たぶん、避難民の列は10キロくらい続いていたんじゃないでしょうか。ところが国境に着くとロシアの将校が『国境は封鎖するから帰れ』と言うんです。

しかたなく私たちは引き返し、シャミユルト村まで戻ったとき、突然、私たちの列に向かって、前方から飛行機がやってきたのです。ものすごい低空飛行で私の乗っている車から操縦士の顔が見えました。ですから私たちが難民だということを彼らは認識していたはずです。すごい爆音と衝撃を受け、車のガラスが飛び散りました。でも、私は頭の後ろにちょっとケガしただけ。午前11時半ころでした。後ろの車にいた息子を探そうと歩き始めると、そこは地獄でした。

私には自分の激しい心臓の鼓動が聞こえました。路上に横たわっている胴体が……。男の人で両手両足がなくなっていたのですが、まだ生きていました。そしていったん目を大きくあけて、それから目を閉じました。バスがこなごなになり、人間の手足が散らばっていました。子どもたちばかり乗っていたバスは、ママーという悲鳴がすごかった」  
《彼女が爆撃を受けた地点から約5キロメートル先の幹線道路の交差点まで難民の列が爆撃されていたとすると、全体ではどれだけの人が犠牲になったのだろうか。リプハンによれば、ロシア軍機は午後6時ころまで飛んでいた。

この現場を撮影した別のチェチェン人ジャーナリストから私はビデオを入手したが、そこには、栗色の髪がついている頭皮、ちぎれた耳、こなごなになった肉片の映像が収められている。撮影者の「カフカスTV」の女性は、タイーサやライーサのようなプロではないだろう。本人にプロフィールを聞いたわけではないが、撮影が下手だから私はそう思う。

撮影者の精神的動揺が、そのままグラグラとゆれる画面に現れている。真実を何とし

ても伝えたいという執念が彼女を動かしているのだ。私が探している「不死身の女」ハズマンも、最初はビデオのスイッチがどこにあるかもわからなかった。彼女も同じような思いで行動していたに違いない。

難民のための「回廊」を三カ所設けるとロシア軍は1週間前から発表したので、避難民の隊列は三つできており、そのすべてが攻撃されたという。わざわざ避難民をおびき寄せて「だまし討ち」したのだ。》

ライーサは、「忘れられない出来事」について語りだす。

「あれは、山岳部にあるマフケトウイ村が爆撃された時のことでした。焼け焦げた11歳ぐらいの子どもを抱え、母親はしばらく泣いていたのですが、やがて落ち着きました。そばでは死んだ子どもを見てレジスタンス兵士が泣いていると、母親は彼にこういったのです。『泣かないで、この子は故郷のため、自由のために犠牲になったのだから』と」

「私自身も戦争で傷ついた子を持つ母親ですから、黒焦げになったわが子を抱く彼女の気持ちわかります。でも、その頃私は真実を報道することに燃えていて、同時に愛国心、民族意識にも燃えていました。だから、この母親も苦しい胸のうちを押さえて、愛国心と自由への欲求がそう言わせたのだと私は思った。

でも、後になって彼女は『息子の心臓が止まったとき、私の心臓も冷え切って氷になった』と言ったのです。あの（故郷のため、自由のために犠牲になったという）愛国的な発言は、彼女の本心ではなかった。そのとき、私はこれまで何も見てこなかったのだと思い知らされました。この母親の心の奥底を感じ取れなかった。そして私は、もっと勉強しなければ、もっと仕事をしなければ、もっと強くならなければならない、と思った。危険を犯しても歩き回って撮影しなければならぬと心に誓ったのです。

たとえ私が死のうとも、だれかに私が撮ったものを見てもらえる。カメラをもつほかの女性も同じ気持ちです」

書き写しながら、モスクワ劇場占拠事件や学校占拠事件の「冷酷非道さ」について考えている。一つは、空爆によって難民を「だまし討ち」したり、大規模な「掃討作戦」によって大量虐殺が日常的に行われているチェチェン戦争のなかにその「冷酷非道」な行為を置いてみなければ、「冷酷非道」のもつ意味がよくみえてこないということ。もう一つは、ロシア連邦軍の蛮行もチェチェン武装勢力の自爆テロも、同じ「冷酷非道」だとしても、武装勢力の自爆テロが自らの生死を前提とした「命がけ」の行為であるのに対して、ロシア連邦軍による空爆にしても砲撃にしても、けっして自らの生死を前提とした攻撃ではありえないことである。安全地帯からの攻撃と捨て身の自爆テロとを同次元で取り扱うことはできない。自分の死を前提とした攻撃には人間としての哀しみがあふれ返っているが、自分の死から遠くかけはなれた陸や空や船からの攻撃には、ただ単に人間を狩猟の対象とする、人間としての劣悪さしか覗き込むことができない。

2005年2月5日記